



## 「あいち協働ガイド de トーク!!」 ～多様な主体との協働を進めるための課題って何?!!～

アフターコロナで様々な活動も再び動き出す中、一つの主体だけではなく、NPO、地域団体、企業、教育機関、行政等の多様な主体が協力して取り組む必要性がより高まっています。そこで、6月18日(日)に、3年ぶりに対面で開催したVNSの総会・記念交流会では、2023年3月に作成された「あいち協働ガイド」をテーマに、その所在地や今後の課題についてトークしました。



### ◆あいち協働ガイドのご紹介 (愛知県社会活動推進課 榊原 悟さん)

○2004年に策定した「あいち協働ルールブック2004」は、NPOと行政が共に相互の立場や特性を認識しながら共通の目的を達成するために協力するという理念を表現したもので、現在もNPOと行政の協働の指針となっています。

○しかし、近年多様化、複雑化する地域の課題を解決するためには、NPOと行政だけでなく、企業や大学その他の団体など多様な主体と共に連携・協働して取り組むことが求められています。そうした社会情勢をふまえた多様な主体との協働を主眼に作成したものが「あいち協働ガイド」です。このガイドを活動の折々でお役立ていただけたら幸いです。

・P3「ガイドの使い方」横軸にどんな方に読んでほしいかターゲットに分け、協働しようとする方のさまざまな状況に応じて5つの章をご活用いただけるように表にまとめました。

・P8～「主な協働相手の範囲」 協働する多様な主体の特性を記載しています。

・P18～「協働の実施に向けて」 協働のプロセスと共に、実践的な情報として、コーディネーターに求められる力、育成などの話題や意見交換手法である地域円卓会議について説明しています。

・P31～「事例から見る協働」 伊藤さんからご紹介のある事例と、「多文化多様性の輝く保見団地プロジェクト」の2つを紹介しています。地域団体、NPO、大学等との連携により、各々の強みを活かして相乗効果を高め、取組を進める中で協働の輪を広げています。



▲あいち協働ガイド  
あいち NPO 交流プ  
ラザウェブサイトで  
ダウンロード可

### ◆産学官連携によるフレイル予防事業への取組 (住友理工株式会社 経営企画部 CSR推進室 伊藤かおりさん)

○住友理工株式会社は、主に自動車用高機能ゴムやホースを製造しています。SDGs 達成への取組みとしては、自社の技術や事業活動を通じて地域社会とともに社会課題を解決することを目的とし、健康介護製品の開発やフレイル予防をはじめとする市民の健康維持・増進のための健康づくり事業を推進しています。

○フレイルとは、加齢とともに身体機能や認知機能が低下して「虚弱」になった状態のことで、健康な状態と介護が必要な状態の中間の状態を言います。フレイルの段階で早期に発見・把握することで適切な介入・支援で健康状態を改善し、健康寿命を延ばすことにつながります。住友理工では、地域包括ケアシステムをはじめとした「健康」「医療」「介護」に関する地域福祉の向上などを目指し、糸島市(福岡県)、九州大学との間で3者協定を締結。協働で開発したフレイルチェックシステムを使用し、糸島市民の皆様に協力をいただきフレイル予防に関する研究を進めてきました。

### ●糸島市での協働・連携のポイント

①社会ニーズ 高齢化や医療費増加等の社会課題に対して、「フレイル予防」等の行政ニーズを先取りした開発テーマを設定しました。

#### ②共通の目標設定

多様なセクター同士の連携では、お互いの特性をよく知り、WIN-WINとなる共通の目標設定が必要。糸島では、  
<行政:市民の健康寿命を延ばすこと><大学:研究による成果を実用化すること><企業:新たなビジネスモデルをつくること>と各々の取組みによるメリットと役割を明確にし、各分野での連携による「地域包括ケアシステム」の新たな“いとしまモデル”をつくるという共通目的を掲げ、記者発表にて公言。その成果として自治体を巻き込んだ市民参加型の研究開発体制が構築され、フレイルチェック糸島モデルが誕生しました。

### ③持続可能な仕組みづくり

研究の活動拠点「愛称:ふれあいラボ」を開設し、市民を対象にフレイル疫学研究を開始。研究には“研究参加者”として市民(特に男性)に参加をしていただきました。その中から市民リーダーを育成し、市民が自主運営するフレイル予防運動サークルの立上げを支援。これは市民が自分たちで運営するルールを引いたという点が特徴です。現在は、9つの教室へと広がっています。

### ④成功事例を他地域で展開

現在、糸島市での研究成果をもとに、本社所在地である小牧市で社会実装するため、市民への“気づきの支援”と位置付けた「小牧モデル」を小牧市と協働で展開しています。現在、60才以上の市民を対象に「小牧市フレイルチェック測定会」を全市域で実施中。今後は、元気な市民が測定者となれるよう、測定員育成プログラムの展開も予定しています。

○これらの活動を達成するためには、コーディネーターの存在が重要です。今回の事例には NPO・中間支援組織は関わっていませんでしたが、3者内に連携に意欲的な人材が集まったことで成果が生まれました。しかし、内部にいない場合、多様な主体との連携には中間支援組織、NPOの力は必要です。そうした団体・人材が発展していくことで、社会課題の解決につながります。みなさまのさらなるご活躍を期待しています。

**お二人の報告の後、小グループに分かれ「多様な主体の協働」の<現在地><今後への課題>を話し合いました。**

ここでは、「今後の課題」部分をご紹介します。「出会いの場づくり」「コーディネートの担い手育成」「協働の仕組み化へのサポート」等は、まさに、中間支援組織の取り組みが期待される部分です。皆さんからいただいた意見を、次年度以降の取り組みに活かしていきたいと思います。このレポートをご覧になって、「こんな取り組みがあると協働が進むと思う」等のアイデア・ご意見がありましたら、ぜひお寄せください。



#### 多様な主体との協働を進めるための今後の課題とは？

##### 出会いの場をつくる

- ・出会いの場、課題に気づいている企業にアピールする機会があるとよい。
- ・企業のノウハウを紹介し、NPOとの対話でコラボが生まれるような場（一方通行のPRではなく、偶然からコラボが生まれることが多い）
- ・活動分野を超えた「横軸」を通す場・機会をつくる。
- ・一市町村ではなくエリア単位で協働のしつみを共有できると広がりが出る。
- ・大学は、アプローチする入口として熱心な先生とつながることが有力。

##### 情報サイトやマッチングの仕組

- ・マッチングできるホームページがあったり、仲間づくりができたりするとよい。
- ・県としての取組は、プラットホームをつくることを期待
- ・出会いの場を活かすには、ツールを使って発信する側・受ける側がアンテナを張っておく必要がある。
- ・意識が高く給与も高い若者は社会貢献の関心は高い。
- ・若者たちに、色々な仕事があることを知ってもらうツールがあるとよい。

##### 可視化や仕組み化

- ・自分たちのメリットを明確にさせること。
- ・「NPO」「民間企業」と同じ比較ではなく、NPOの良さやいいところを意識して取り組まねばならない。
- ・協働する時の財政面の負担を可視化すると、具体的に取り組みやすい。
- ・担当が代わっても持続するような仕組み化を考えること

##### コーディネート力

- ・コーディネートする人材を育成する必要がある。
- ・市民活動団体の担い手不足の課題に関して、新たな層へのアプローチをIT、DXを活用しながら展開する必要がある。
- ・活動の楽しみは、自分たちで創造すること。若い人たちが自分たちで楽しめる場を始めることを広くサポートすることもよいのではないか。